

遊星仮面 リメイク用物語設定

2023/2/11 追加・修正 by OHYABU

◆地球Ⅱ「地球国」 地球人

人口爆発と資源枯渇と戦争に苦しむ二十●世紀の地球。火星をかすめた巨大彗星が、突如方向を変え、太平洋に激突。地球は壊滅的な被害を受ける。

地球外にいた人類の半分、地上にいた人類の四分の一が数日内に死亡。この日のことは、のちに〈逸失の日〉と呼ばれることになる。

その後も死者は相次いだ。人類滅亡にまでは至らなかった。衝突の大きなエネルギーのほとんどが、ピネロン星をつなぐいくつかのワームホールを再びこじあける方向に向かったからであった。

それでも、刺激を受けた地球本体が巻き起こす天変地異もしばらくは続き、人口減少はさらに数年続いた。

しかし、ピネロン星からのエキゾチック・マターの提供などもあり、連邦国家「地球国」として、結果としてはわずか数十年で奇跡の復興を果たした。

〈逸失の日〉直後の地球では、それまでの国の境界線は意味をなさなくなり、一時的には、民族や部族や宗教の境界も曖昧となったように見えた。

苦難の時代であった。この時代を乗り切ったのは、国連事務総長から地球国初代大統領となったカーライル。次いで軍人出身の二代目大統領フキヤが、「地球国」の行政機構を次のように整備し、奇跡の復興を果たさせることに貢献する。

行政区

〈内地〉

かつての国家や民族や宗教の区別は無視。単純な地理的分割により行政区が設定。

西ユーラシア区 かつてのヨーロッパからロシアの一部も含む

北ユーラシア区 かつてのロシア中心

中央ユーラシア区 かつてのカザフスタンを中心にした中央アジア

南ユーラシア(サイクロン)区 かつてのインドからイラン、アラビア半島あたり

東ユーラシア(タイフーン)区 かつての中国から東南アジアあたり

オセアニア区

アフリカ区

北米区 中米も含む

南米区

極地・海洋区 北極と南極、海洋全般

それぞれの区内には、かつての国家に近い**自治国**があるが、自治権は弱い。しかし近年、曖昧となっていたかつての民族や宗教などの復古運動や、それに基づく独立運動や排斥運動などが起きてきている。

〈外地〉

月区 軍事上の設定領域は（月エリア）

火星区 軍事上の設定領域は（火星エリア）

木星区 軍事上の設定領域は（木星エリア） 巨大なジュピター・ステーションが拠点になっている

実質、**軍事部（現 防衛部）**が統括。そのため、「区（＝ward）」よりも「エリア」呼びが一般化している。

木星区へは、〈**逸失の日**〉後は、火星区から**ローカル・ワームホール**を使って移動できるようになり日数が大幅に短縮されるようになったが、ルートが不安定なことが問題となっていた。

そのため、航行記録データをジュピター・ステーションに蓄積し、そこからルートを予測する航法によって、安全性と効率化をはかっている。

中央政府機関

大統領府

行政部／法務部／文化部 （本部）西ユーラシア区とアフリカ区

広報部／治安部／交通部 （本部）北米区

通商管理部 （本部）南ユーラシア区

食糧管理部 （三本部制）東ユーラシア区／オセアニア区／南米区

資源管理部 （三本部制）北ユーラシア区／アフリカ区／極地・海洋区

外地統括部 （本部）中央ユーラシア区 （支部）極地・海洋区

軍事部 ↓開戦後は防衛部と改称

総合本部 中央ユーラシア区

●外地軍 内地での中心拠点は、中央ユーラシア区

外地での中心拠点（本部）は、火星 ↓開戦後は月に移動

●内地軍 中心拠点は、南米区

兵站局 （拠点は食糧管理部の三本部に付随）

兵器局 拠点は北米区

※北米にある政府機関（広報部、治安部、交通部）は、ピネロン星との開戦後は、軍事部（↓のちに防衛部）の直接指揮下に。

※行政部には最も多くの下部組織（局組織など）が存在する。それらの拠点は西ユーラシア区とアフリカ区に点在。

三代目大統領**アデル**は、就任まもない約十年前に、**リース財閥**（※後述）からの干渉を避けるために、大統領府と行政部総務局を西ユーラシア区のジュネーブから、アフリカ区にある**アースシティ**（エチオピアの高原地帯あたり？）に移転させた。それ以降、地球の首都も**アースシティ**となる。

※政府機関で働くのは、試験で選ばれた官僚。選挙は、社会が安定するまでは猶予可能との「**地球国憲法**」の規定があり、そのためかいまだ大統領選挙しか実施されていない。

「地球国」でも後述の「ピネロン国」でも、住民管理は厳格。

「地球国」では、国民はもちろんのこと、ピネロン人も長短かわらず地球に滞在する者すべてが、各個人の個人情報を入力した**ID時計**を持つことが義務化されている。（管理しているのは行政部の下部組織。）

個人からの情報発信は**ID時計**を通じてのみで、原則として一対一でしか許されておらず、会話は検閲できるように設定されている。（政府関係者がもつ**ID時計**には、もう少し高い機能が付けられている。）

さらに国民や長期滞在者は、各世帯に一台パソコンを設置することが義務づけられており、そこから流される中央政府の指示に従うことが義務化されている。

経済を動かしているのは、一部の財閥や巨大企業。なかでも**リース財閥**（本社は西ユーラシア区）の力は絶大。

リース財閥はもともと一民間航空会社に過ぎなかったが、（**逸失の日**）後、命からがら地球外から戻ってくる人たち（**引揚者**）への援助や保護を行い、さらには**エキゾチック・マター**の管理も行ったことで巨額な財をなし、最近まで地球とピネロン星、どちらの国の経済をも牛耳っていた。

〈**逸失の日**〉が原因で親を失った子供たちは、**コメット・チルドレン**と呼ばれ、大人となった現在も心の傷を抱えている人たちがいる。

放射性物質の封印も含め、地球の驚異的復興を助けた**エキゾチック・マター**。地球にとっては異物なので、いろいろ問題が起きてきている。最初は重力の狂いが出て人体に影響が生じていた。徐々にそうした被害は減ったものの、まんべんなく大気中に漂ってしまったため、特に電波を使った通信に甚大な影響を及ぼすことに。

◆ピネロン星Ⅱ「ピネロン国」 ピネロン人

恒星ソルド・ピネロン。その周囲を回る惑星がピネロン星。(太陽系に当たる用語は、**ピネロンゾーン**。)

地球とほぼ同じ自転速度と公転速度で回る。この奇跡は、ダークマターのようなものとなされている**エキゾチック・マター**が惑星にへばりついていてためだと言われている。重力の糊、とされる透明・特殊なもので、惑星を物理的に安定させるとともに、宇宙から来る大量の放射線から、生物を守ってきた。

そもそもピネロン星は、地球よりも降り注ぐ放射線が多い。その一部は空高くに漂う粒子化した**エキゾチック・マター**の盾をすり抜けて地上に到達。そういう場所は砂漠(Ⅱ**死の砂漠**)となつて点在している。さらに地軸の傾きの問題で、ほとんど季節はなく、常に熱く明るい部分と、逆に常に寒く暗い部分が多いなど、人類が楽に生存できる居住域は、地球よりもはるかに狭い。

地球より風は強い。ただし地球のような激しい地殻変動はない。そのため土地の隆起は少なく、川は多くが地下水脈になつている。

かつて**ワームホール**を通じて地上で地球とつながっていたと思われることから、生態系は地球とあまり変わりが無い。人類も、地球人類と見かけも遺伝子的にもほとんど違いはない。ただ、生物の種類や数は地球ほど多くはない。それでも、生態系の最も基礎に当たる微生物の種類や数だけは地球とあまり変わらないため、地球生物がピネロン星に住むこと、あるいはその逆も可能。ただし病原体、さらに生殖のさいには**注意が必要**となる。

人類の数は、(逸失の日)後の地球人類の数と同じくらい。つまりもともと、地球人類よりはるかに少なかった。前述したとおり、人類が住める場所が圧倒的に狭かつたためである。その狭い居住域の中で、大半の人々は地上よりも地下で暮らすことを選んだ。地下はつながれ、言語はおのずと統一された。そのため現在の基本的文法は、方言は多いもの、ほぼひとつに集約されている。

人類の種類(Ⅱ人種)は、「ピネロン国」の公式発表ではひとつ。瞳の色は緑がかった灰色、髪の色や肌の色は薄めが多い。とはいえ地球人類との違いは、後述する**ピネロンマーク**と耳の形を除けば、一目ではわかりづらい。

ただ、「ピネロン国」公式は否定しているが、黒い髪と瞳に肌の色の濃い、あきらかに別の人種・通称**アルギナの民**と呼ばれている人々もいた。彼らは、地球と交流がはじまる以前に、すでに地球人に近い文化を持っていたが、水源である森に住んでいたこともあって、最近になつてほぼ滅ぼされてしまったという。

ピネロン人が地球人と大きく違うところは、放射線に対する高感度センサーが、最も放射線から保護されるべき頭部に備わっていること。両こめかみにある十字の形をしたあざ**ピネロンマーク**。放射線が多くなると、ここから特殊ホルモンが放出され、すぐに頭痛という信号につながり、身を守ることができる。

脳波も若干地球人と異なる部分がある。一方でその**ピネロンマーク**が、見えにくいのか、全く付いていないように見える人間もたま

において、差別の対象になってきた。「アルギナの民」には、付いていない割合が多かったと言われている。）
なお、ピネロンマーク周辺の筋肉の進化で、ピネロン人の耳はとがっている。

星の環境が厳しい分、科学技術の進歩は地球よりも早く、しかも独自の方向へと進んだ。金属資源を含め、元素にもとづく資源が少なかったことは、逆に元素にもとづかない資源——つまり、ダークエネルギーやダークマター的なもの、特に**エキゾチック・マター**の活用を、より早くすすめることとなった。
放射線に感度が高い身体を持ったことは、放射線を含めた電磁波（光や紫外線や赤外線や電波なども）をさまざまに利用する、独自の科学を進化させた。電磁波と自分たちの脳波とを連動させる、いわゆる**脳波誘導システム**もそのひとつである。

現在の「ピネロン国」での国民管理も、**脳波管理**となっている。そのために国民は脳波をとらえるためにIDチップを、幼児期に手足のどこかに埋め込まれる。（多くは左腕に。）地球人の場合、長期滞在者には埋め込みが義務づけられる。短期の場合には強制されないが、埋め込まないと、IDチップを通じて出される脳波で**社会インフラを動かす**ピネロン社会では、不自由な生活を強いられることになる。

地球人と接触する直前までは、ピネロン人社会は大きく二つに階層化されていた。地上に住む人々と、**地下を支配する人々**とに。

地下世界は、惑星内を縦横無尽につなぐ通路が通っており、科学者たちの世代を超えての尽力で整備されてきていた。それに対し地上は、**死の砂漠**で「島」状態に分断され、移動も不自由で、人々は食糧生産にいそしむことが主だった。

宇宙開発にたずさわる科学者や技術者たちも、多くが地上にいた。彼らは、地球と接触し、地球から流入してくる資源や文化を積極的にとり入れたことで、地下に住む人たちとの力のバランスが逆転。内戦が勃発した。

内戦は苛烈であったが、地球側にはほとんど伝えられることなく数年続き、地球と直接的に人と人との行き来ができるようになるプロジェクトが開始される頃には終息し、統一は完了。星全体を「ピネロン国」と規定するようになっていた。

地球との戦争直前の政治形態は、各コミュニティから選ばれた代表者が集まったの合議制だった。さらに、彼らを助ける執行官（官僚）もいた。

寄り合い所帯のような政府であったためか、火種は絶えなかった。利害や思惑の違いで何度も対立が起きる。地球と直接交流をもったことで起きてくるさまざまな問題、また両星の未来をめぐる対立が起き、失踪や暗殺も起きてきていた。

一部勢力が、利権欲しさに地球政府からの依頼を受け、原爆処理を請け負った。地球から原発を移送させる途中、トロント市上空での謎の大爆発が起きる。直後、軍人ホイヘンスによるクーデターによって政府は倒され、社会組織は再び変革されることになる。

ホイヘンスは、**サップス**と呼ぶ自らの私設軍隊を使いながら、旧体制から一部官僚を集めるの独裁をしき、報復のためとして地球に戦争をしかける。

なお**サップス**は、かつての内戦で親を失った子供たち（＝一部では「**ソルドの落とし子**」

たちなどと呼ばれている)が主流を占めている。

ピネロン星の首都は、地下と地上を含み行政機関が集中する、**ウルク市**。

トロント市は、そこから少し離れた地上にあった「一般市」だった。

「市」とは、人々が地上で安全に暮らせるように守られた**ハビタブルスポット**のひとつ。

◆地球とピネロン星

地球とピネロン星とを結ぶワームホールは、かつてはどちらもおもに地上で開いていたようだが、彗星の衝突が複雑になり歪みが生じたためか、どちらも宇宙空間上に複数個所開くことになった。

そのため、場所の特定と、通行手段の開発のために、十年あまりかかることになった。(それまでは通信を通じて交流し続けた。その間に地球の文化がいつきにピネロン星に流入した。地球名と同じような名前や姓が増えた。)

ホールは五つ開いていることが判明した。地球側から見れば、木星エリアに二つ、火星エリアに三つ。ピネロン側から見れば、どれも自星の近くの宇宙空間に開いていた。

R2ルートは、地球側からは比較的近い火星エリアにあるが、ピネロン側からは最も遠いところに開いている。ピネロン側の出入り口そばには**トーカーサス星**がある。

また、地球の火星エリアと木星エリアの間では、不安定な**ローカル・ワームホール**が開いていることも判明する。

こうしたワームホールの安定化(恒久化)が、地球とピネロンとの科学者たちの最大の目標であった。

ワームホールが機能しなくなった場合の対処のために、**物質伝導システム**と**脳波誘導システム**を合わせた「**孤槍システム**」が開発された。一言で言えば、特定脳波に限定された空間移動。それは「遊星仮面」の技術背景になっている。

地球とピネロン星との間で行き来ができるようになると、地球にピネロン人がいつきに流入した。その数は、逆よりはるかに大きい。最近では移民の増大にともなう事件、彼らへの排斥運動、地球での文化や宗教の原理主義的な復古活動などが起こっていた。

ピネロン星では、耐性のない地球の細菌や病原菌の流入で、何度も危機的状況が起きていた。

〈逸失の日〉は、この物語の四十二年前に起こった。地球とピネロン星とのファーストコンタクトは、それから一年ほどのち。地球外から引揚者がすべて地球に戻ってこられるまでには、およそ二年かかった。(その間に大勢亡くなった。)

ピネロン星での内戦は、発は三十年ほど前。数年で鎮圧される。この事実は当時ほとんど地球側には伝えられなかった。

ワームホールが確定され、宇宙船が通れるほどに整備され、ピーターの父ロバートが直接ピネロン星にわたったのは、二十年前である。そこから直接人と人との行き来ができるようになった。